ポラン通信

vol.10
2023年8月

なにをすれば良いの？健康診断特集！

ポラン通信も10号目となりました！！今回はよく飼い主さんからご質問の多い「健康診断」についてお話しします。医学の進歩、動物の長寿化などにより、日々進化する動物医療。あくまで現在、当院獣医師が考えるベストをご紹介します。

いつからはじめるべきか？

結論から申しますと、犬も猫も若いうちから健康診断を実施して早すぎるということはありません。実際のところ、当院では1歳からフルコースの動物ドックを行い**先天性疾患**などを発見できたケースも多いです。下に当院でお勧めするスケジュールを記します。

1歳から10歳	：最低でも年に1回
10歳から15歳	：半年に1回
15歳以上	：3ヶ月に1回

全てが同じ内容というわけでなく、例えば持病がでてきた場合は、それを重点的にした内容の検診(≠健診)に切り替えたり、獣医師とオーダメイドで実施していきます。

血液検査＝なんでもわかるわけではない！

「とりあえず動物の健康診断といえば血液検査でしょ！」みたいなお話をよく聞きますが、答えは「NO!!!」です。例えば人間のお話として、女性の生理不順があったとして、血液検査をすれば原因はわかるでしょうか？貧血くらいは見つかるかもしれませんが、おそらく異常なしとなってしまうでしょう。本来はエコー検査で子宮や卵巣の異常を調べると思います。**血液検査は最低限行うもの**として、他に必ず**画像検査**も推奨されます。そして、データを蓄積しておけば、具合が悪い時と比較することができるのです。裏面でどんな検査でどんな病気がわかるかのご説明をいたします。

身体検査

体重・体温・視診・触診・聴診をします。1番の基本です。痩せているか太っているか、痛いところはないかなどもわかります。加齢による目の変化や歯周病などもチェックします。

レントゲン検査

若いうちから絶対にしておいた方がよい検査です。というのも、過去に健康診断のレントゲンで先天性疾患が見つかった子が多いからです。検査は主に胸部と腹部を撮影します。呼吸器・循環器・関節疾患ではなくてはならない検査です。また結石なども発見できます(胆石・尿管結石・腎結石・膀胱結石など)最近は猫の股関節形成不全などもみうけられます。

便検査

寄生虫の有無、細菌バランスを確認します。そもそも飼い主さんが思っている正常便が獣医が思うより固すぎる、柔らかすぎることもあるため普段の便を知る大切な機会です。

尿検査

濃いか薄いか、血液やタンパクが出ているか、細菌感染結晶の有無など確認します。

血液検査

みんな大好き血液検査。採血さえできれば結果は数値として出るため、基準値からはみ出てる出てないで判断しやすいので勧められがち。本来は他の検査と組み合わせ、過去のデータを比較し判断するべきです。外部検査に依頼する心臓病マーカーや、ホルモン検査などを必要に応じて追加できます。

超音波検査

妊婦さんがお腹にゼリーつけてチェックするあれです。レントゲンが外側からしか見えたいのに対し、超音波は内臓の構造などがわかりやすく、また被曝することがないのでとても便利です。心臓の病気では必須の検査です。また血液検査で内臓の数値が悪いといわれたらまず検査すべきです。ありがちなのが血液検査で腎臓の数値が悪かった→腎臓病です！みたいな診断ですが、本来は尿検査画像検査など組み合わせます。腎臓の異常だけでも左右の大きさの違い、腫瘍の有無、結石の有無、腎盂の拡張、皮質髄質の構造が正常か、腎嚢胞はないかなどみるべきとことは沢山あります。

血圧測定

犬猫も高血圧症があります。モニターは定期的に必要です。